

失業がもたらす 貧困および自殺のリスクと心理的变化

水 口 勲
廣 川 進

I. 問題と目的

2008年のリーマンショック以降、雇用情勢の悪化に伴い、非自発的な失業者が増加し、生活保護を受給する稼働年齢層は増加の一途をたどってきた。失業率については、近年やや回復傾向が見られるものの、総務省「労働力調査」等によればピーク時の2009年には非自発的な失業は146万人にのぼり、生活保護受給者数は2011年に過去最高を記録し、2013年時点において216万人となっている。中年男性に限れば、失業者の構成比において2009年まで一貫して増加傾向にあり、生活保護受給者の年齢階層別推移をみても、中高年は2009年以降急激に増加している。

四方・駒村(2011)の研究では『中年年齢層男性は、正規雇用の貧困率は低いものの、失業時の貧困率は、若年層や女性中年年齢層および高齢者層の失業者に比較して際だって高い』とされ、『世帯内に他の就業者がいる場合には、貧困率は抑制され、貧困リスクを分散しているが、現実には、約半数の世帯に他の就業者がおらず、他の就業者の存在という保険は期待できない』と述べられている。

一方、日本における自殺者数は1998年に年間3万人を超えて以降、長らく3万人台で推移してきており、ようやく2012年に2万人台に減少した。原因別にみると、「健康問題」について「経済・生活問題」が多いが、2010年以降、「経済・生活問題」は減少傾向にある。土堤内(2010)は、『日本の自殺者を性・年代別にみると50代男性を中心に60代男性、40代男性が

多いことが中高年男性クライシスの一端を象徴的に物語っている』とし、澤田ら（2010）は『多くの実証研究において、失業率が高いことと自殺率が高いことの相関関係が明らかになっている』としている。

森田（2008）は、『先行研究では、自殺願望という個人の意識レベルにおいて、いかなる社会的背景をもつ人々が、自殺行動にいたる潜在的な危険性をもっているかという視座が見逃されてきた』として、自殺願望の規定要因を検討し、『20 歳から 59 歳までの場合、男性では、失業の可能性が高い、健康状態が悪い、友人との交際頻度が低い者が自殺願望を抱きやすい』と述べている。

以上より、失業は貧困および自殺のリスクを増大させるものと考えられるが、『中年年齢層の貧困についてはこれまで十分に考察されてこなかった』（四方・駒村, 2011）との指摘がある。失業者の心理的支援については、いくつかの先行研究があるが、失業を貧困という概念と関連づけ、求められる支援について考察を試みる研究はほとんどみられない。そこで本研究においては、おもに中年男性の失業がもたらす貧困および自殺のリスクを示し、必要な心理的支援の考察を試みる。精神的健康の保持・増進を図ることを目的のひとつとする臨床心理学の視点から、失業、貧困、自殺の問題を検討することは、新たな知見をもたらすものとして意義あるものとする。

なお、本研究で使用するデータは、某県 X 市の保健所とハローワークが共同で取り組む自殺対策事業の一環として行われたインタビュー調査にもとづくものである。この事業は平成 23 年度以降、対象者を「働き盛り世代の男性」、なかでも「働き世代に属しながら職に就いていない人」と規定し、彼らの支援ニーズを探る試みとして実施され、これまでにない先駆的な取り組みとして、意義のあるものである。本研究において新たに分析を加え、現場に還元することで、当事者の方々への支援の一助となることを期待する。

Ⅱ．方法

インタビューは、ハローワーク利用者に対し「メンタルヘルスマニター」

への参加協力を求めるという形がとられた。対象者には、インタビューの趣旨を説明した上で、同意書の提出をもって同意を確認した。さらに事前に同意を得た上で録音をおこない、個人が特定されない処理をすること、データ使用後は破棄することを伝え、倫理的配慮をおこなった。本研究においては、当該機関の承諾を得て、この事業にアドバイザーとして関与する第二筆者を通じて、第一筆者へデータが提供された。調査の概要は、以下のとおりである。

- ・ 調査時期：2012年8月～10月
- ・ 調査場所：X市ハローワーク面談室
- ・ 調査対象：ハローワーク利用者
(失業中で求職中の方)
男性 20 名、女性 10 名
平均年齢 男性 46.7 歳
女性 41.9 歳
- ・ 調査内容：フェイスシート
日本版 SDS
(自己評価式抑うつ性尺度)
人生曲線
半構造化面接

調査対象者全員に対し、フェイスシートで「家族状況」「失業時期」「前職の職種・雇用形態」「年収」「学歴」「住居形態」「生活保護給付希望の有無」「体調について」の 8 項目について尋ね、半構造化面接の中で「失業前、失業時から現在までの出来事と気持ちの変化を示す」人生曲線を描いてもらった。本研究では、今回の調査対象となった男女 30 名のうち、本研究の目的に沿って女性を分析の対象外とし、インタビューデータが得られた方々を SDS 得点の中央値で 2 群に分けたところ、SDS 高群 8 名、SDS 低群 7 名というグループ分けとなった。

インタビューデータの分析にあたり、本研究では KJ 法とテキストマイニングの両方の手法を併用することとした。これは KJ 法をテキストデータの整理のために用いた場合、『整理作業者が手作業で記述を整理していくので、整理作業者の主観に左右されやすいという問題がある』一方で、『形態素レ

ベルでのテキストマイニングでは、データの取り方や分析の仕方によっては、文章全体としての意味づけや文脈の情報を見落としてしまう場合がある』(勝谷ら, 2011) ためである。

まず、KJ 法とは、文化人類学の分野で川喜田二郎が考案した発想法 (川喜田, 1967) で、心理学や看護学をはじめ多様な領域に応用され、質的データの分析方法としても利用されている。データ分析の際には、名刺程度の大きさのカードに転記したデータをグループ分けし、グループごとの関係を図解化した上で、それを文章化し解釈を行うとされる。本研究においては、KJ 法におけるグループ分けの手法を用い、逐語録をテキストデータとし、意味の単位ごとに区切り、カード化したものを、内容の類似性により一時的にまとめグループ編成した後、同様にまとめた他のグループと比較し、カテゴリーに分類した。

つぎに、テキストマイニングとは、テキスト (文章) を対象とするデータマイニングである。通常、生の文章データを対象に行われ、形態素 (意味を持つ最小の単位) 解析により単語レベルに切り分ける等の自然言語処理を前処理としておこなう場合が多いとされる。テキストマイニングにはいくつかの手法があるが、本研究においては「KH Coder」(Ver.2.beta30;2013) を用いて分析をおこなった。KH Coder とは、新聞記事やインタビュー記録など、社会調査によって得られたテキストデータを計量的に分析するために制作された、テキストマイニングのためのフリーソフトウェアである。

KH Coder の機能は、『質的データにある種の数値化操作を加えて計量的に分析する。その目的はおもに 2 つで、客観性の向上とデータの探索である』(武田ら, 2012) とされる。KH Coder の開発者である樋口 (2013) は、『容易に目を通せないほどデータが大量にある場合、人が読むだけでは偏った印象をもってしまうかもしれない』とし、計量的な分析の利点を活かすことを勧めているが、一方で『データの一部を引用して解釈を加えることも否定しないし、むしろ推奨している』として、計量的な分析がめざすデータ探索の方法を示している。

本研究における分析の手順は、以下のとおりである。逐語録をテキストデータとし、インタビュアーの質問も含めて分析をおこなった。それは、インタ

ビューの特質上、質問と回答を切り離してしまつては文脈としての意味をなさないと考えられたためである。KH Coder を用いて形態素ごとに分かち書きし、続いて、頻出語リストを作成し、共起ネットワーク分析、対応分析をおこなった。共起ネットワークについて、野村・丸野（2009）は、『語どうしの共起（一つの文の中に同時に出現すること）情報に注目した自然言語処理技術として、共起ネットワークマッピングが開発されてきている』とし、『語の共起関係から関連性の強さを推定し、概念図を描く』ものとしている。KH Coder を用いれば、段落単位で語どうしの共起関係の分析をおこなうことができ、二次元画像として描画することができる。対応分析では、抽出語を用いた分析をおこない、その結果を2次元の散布図に示すことで、出現パターンの似通った語を探ることができるとされる。

Ⅲ．結果

まず、全体的な傾向をつかむために、調査対象者全員の SDS 得点や自殺念慮とフェイスシート項目間の相関係数を求めたところ、SDS 得点と自殺念慮 ($r=.711, p < 0.1$)、学歴 ($r=.372, p < 0.5$)、また自殺念慮と学歴 ($r=.513, p < 0.5$)、雇用形態 ($r=.524, p < 0.5$) の間に有意な相関がみられた。つぎに、先述のように群分けした SDS 高群（8 名、平均 54.8 点）、SDS 低群（7 名、平均 38.8 点）、それぞれの SDS 得点の平均の差について Welch の検定をおこなったところ、 $t(10.97) = 5.46, p < .001$ で有意であった。また、SDS 高群の半数には生活保護受給の希望があった。

KJ 法におけるグループ分けの手法を使ったインタビューデータの分類からは、SDS 高群で 7、SDS 低群で 10 のカテゴリー（【】で示す）が得られた。具体的には、SDS 高群が【失業による変化】【病気について】【借金の存在】【存在意義】【生活保護】【支援ニーズ】【仕事への姿勢】、SDS 低群が【失業による変化】【いまの感情】【現状肯定】【家族について】【生活保護】【支援ニーズ】【今後の展望】【資格試験】【就職活動】【失業で得たもの】であった。

各カテゴリーに含まれる概念（＜＞で示す）は、SDS 高群 37、SDS 低群

表1 群別にみる頻出語（上位 50 語）

SDS 高群				SDS 低群			
抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
1 思う	220	26 受ける	27	1 思う	130	26 年金	23
2 仕事	178	27 場合	27	2 仕事	124	27 面	22
3 今	161	28 働く	27	3 今	78	28 ストレス	21
4 言う	100	29 保護	27	4 自分	75	29 感じる	21
5 気持ち	98	30 探す	26	5 言う	60	30 行く	21
6 自分	98	31 失う	25	6 失業	59	31 試験	21
7 生活	96	32 当然	25	7 人	59	32 ハロワーク	20
8 失業	79	33 無い	25	8 気持ち	53	33 出る	20
9 人	67	34 面	25	9 会社	47	34 一番	19
10 前	65	35 関係	24	10 状態	39	35 見る	19
11 会社	58	36 支援	24	11 現在	36	36 支援	19
12 考える	54	37 ある程度	23	12 良い	34	37 資格	19
13 相談	45	38 心	23	13 受ける	33	38 受かる	19
14 状態	41	39 入る	23	14 変わる	32	39 場合	19
15 一番	40	40 分かる	23	15 質問	31	40 月	18
16 出る	38	41 来る	23	16 生活	30	41 形	17
17 行く	37	42 お金	22	17 書く	29	42 働く	17
18 変わる	35	43 持つ	22	18 前	29	43 難しい	17
19 ストレス	34	44 自殺	22	19 お金	27	44 来る	17
20 家族	34	45 書く	22	20 探す	24	45 活動	16
21 聞く	33	46 保険	22	21 分かる	24	46 持つ	16
22 現在	32	47 悪い	20	22 聞く	24	47 失う	16
23 感じ	31	48 人材	20	23 感じ	23	48 実際	16
24 派遣	30	49 話	20	24 考える	23	49 入る	16
25 感じる	27	50 下がる	19	25 就職	23	50 違う	15

※網掛けは各群のみにみられた語を示す。

25 であったが、具体的には以下のようなものがあつた。SDS 高群においては、【失業による変化】では<失業でなくしたもの>等、【病気について】では<うつ症状>等、【借金の存在】では<妻の借金>等、【存在意義】では<希死念慮>等、【生活保護】では<生活保護の検討>等、【支援ニーズ】では<相談相手の存在>等、【仕事への姿勢】では<やりたい仕事>等となった。SDS 低群では、【失業による変化】では<失業でなくしたもの>等、【いまの感情】では<変な感じ>等、【現状肯定】では<ストレスなし>等、【家族について】では<家族の目>等、【生活保護】では<生活保護の認識>、【支援ニーズ】では<助け合うコミュニティ>、【今後の展望】では<やりたいことは何か>等、【資格試験】では<試験が目前>等、【就職活動】では<就職

活動>、【失業で得たもの】では<失業で得たもの>等であった。

KH Coder を用いたテキストマイニングによる分析からは、頻出する上位 50 語の中から「仕事」「失業」「自分」など、SDS 高群、SDS 低群に共通する語を除き、それぞれの群に単独して表出された語のうち、SDS 高群の特徴語として「相談」「保護」「自殺」「悪い」などの語が、同様に SDS 低群の特徴語として「良い」「就職」「資格」「活動」などの語が得られた（表 1）。

つぎに、共起ネットワーク分析をおこなったところ、図 1、図 2 のようなネットワーク図が得られた。これは、『大量の文章をデータとして利用することによって、語の共起情報からその文章の背景にある語どうしの関係性を推定し、描画する』（野村・丸野, 2009）ものである。KH Coder では、強い共起関係ほど太い線で結び、出現数の多い語ほど大きな円で示される。SDS 高群については「人材」と「派遣」、「保護」と「受ける」、「ストレス」と「感じる」が、SDS 低群については「就職」と「活動」、「失業」と「気持ち」、「ストレス」と「感じる」が、それぞれ共起性の強い語として示されたが、これ

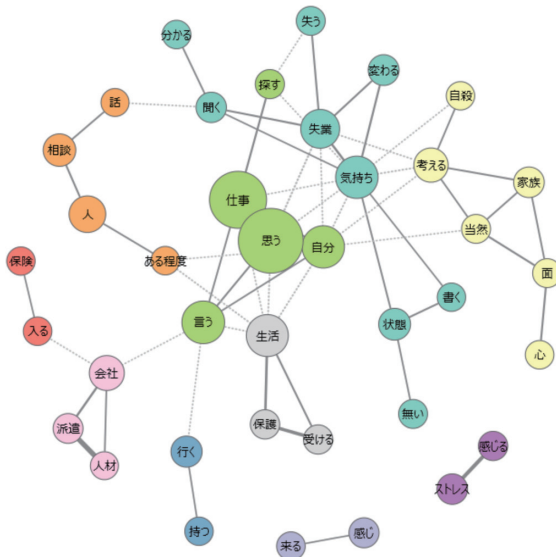


図 1 SDS 高群の共起ネットワーク

八

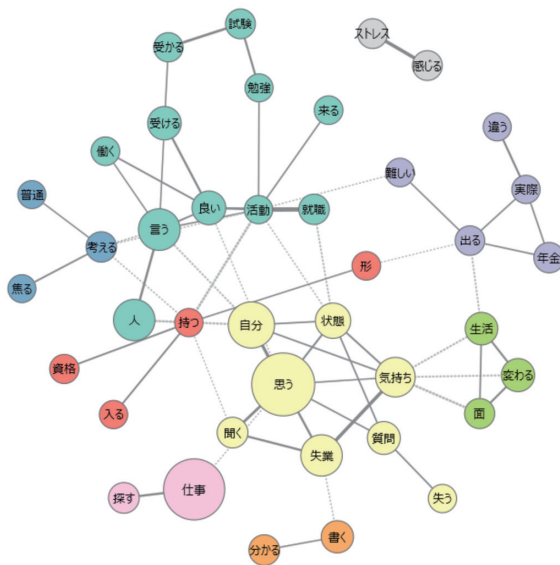


図2 SDS 低群の共起ネットワーク

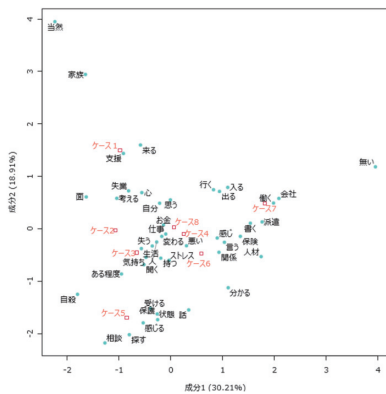


図3 SDS 高群の対応分析

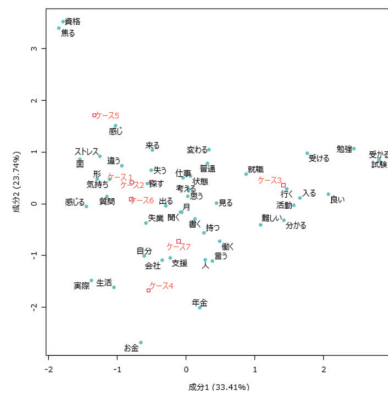


図4 SDS 低群の対応分析

らは必ずしも頻出語の上位に位置するものではなかった。それぞれの語に関連する箇所を、逐語録より引用し以下に示す。

< SDS 高群の逐語録より >

「人材」「派遣」：「ところが、リーマンショックや何かで、ここで打ちどめになって、この生活水準が今度は、この間はやっぱり派遣も含めていますので、ヘルパーの派遣とかの。人材派遣会社になっちゃうんですが、当面落ちるところまで落ちます。自分が落ちました。」(47 歳)

「今回が、いやあの、今までその、何社か人材派遣会社に登録して、その、い、一流企業さんに、その、仕事で行ったりとかはしてましたけど、こんなあからさまに給料が少ないのは初めてだったので。」(34 歳)

「保護」「受ける」：「それで、市長さんに生活保護をお願いすると、車はぜいたく品となる。車の免許があっても、車がないから当然仕事がない。仕事がないから収入がない。悪循環の連鎖反応の輪とされますね。」(47 歳)

「一時的に。それが生活保護を受ける前の状態で、生活保護を受けて、それを後ろ盾に行ける、いってはいかんけど、それで仕事を探せるようになって、ある程度気持ちも、「きょうの晩、何を食う」とか、そういうような局面がなくなったものですから。」(50 歳)

「ストレス」「感じる」：「やっぱり嫁さんに気を使う…気を使ってしまいますね、うーん。気を使ってしまうのと、んー、あとストレスというか、楽しめない…何をしても楽しめない、テレビ見てもおもしろくないし…ストレス…ストレスなんかいっぱいありますけどね。」(34 歳)

「うん。すごいこう、精神的にはストレスを感じている。」(34 歳)

< SDS 低群の逐語録より >

「就職」「活動」：「今はもう職員の方には話して、「前に手帳を持ってたから」といって、あなたは今障害者ではないと思いますよ。」って言っていただいて、ちゃんと普通に就職活動した方がいいんじゃないのっていうので、一般の方でやっているんですが。」(42 歳)

「失業」「気持ち」：「失業…うーん、まあ得たものは多いですね。あの一、結構勉強してるので分かりますところもあるんですけど、ああ泣く人多いって言うのが。」(42 歳)

「失業中ってのはねえ、やっぱりある部分では家賃どうするのとかいろんな意味で、極端なこと言うと車のガソリン代もどうしようとか、そういうこといっぱい出てきますからね。だから非常に今食生活はみじめですよ。」(62 歳)

「ストレス「感じる」：「自分ではそんな受けてないつもりなんですけど、最初のやっぱその焦るというのが一番大きくて、なんかストレス感じますか？って言われてそんな大きく…まあ感じるかもしれないですけどなんかこう、なんかはつきりこれっちゃうのが、出てこないんですけど。」(39 歳)

「だから、仕事に関するストレスがなくなったかわりに、家のことに対する、家とか生活に対するストレスもやっぱり出てきたのはあって。」(42 歳)

さらに、対応分析においては、SDS 高群および SDS 低群のそれぞれから抽出された語と便宜的に付与したケース番号によって図 3、図 4 のように分析された。SDS 高群と SDS 低群を比較すると、SDS 高群が全体的にやや原点 (0, 0) 付近に集まっているのに対し、SDS 低群は SDS 高群に比べややばらつきが見られた。群別に見ると、SDS 高群では原点付近には「お金」「生活」といった経済的な側面に関連する語や、「仕事」「失う」など失業に関連する語が見られた。フェイスシートの記載から、SDS 高群 8 名のうち自殺念慮をもつ人は 4 名いたが、このうちの 3 人が原点付近にプロットされたが、「自殺」について詳細に語った 1 名は原点より少し離れてプロットされた。一方、SDS 低群では原点 (0, 0) 付近には「失業」「仕事」といった語が見られ、やや離れて「就職」「活動」といった語がプロットされた。SDS 高群では原点付近にプロットされた「お金」が、原点からはかなり離れてプロットされた。SDS 低群では、ケースそれぞれの語りに特徴があり、全体にややばらついてプロットされた。

IV. 考察

分析結果からは、中年男性の一部に失業がもたらす貧困と抑うつ傾向により自殺のリスクが高まることが想定された。まず、全体傾向をつかむためにおこなった相関分析からは、SDS 得点と自殺念慮、学歴、また自殺念慮と学歴、

雇用形態の間に有意な相関がみられることが示されたが、SDS 得点と学歴に相関がみられたことについては、自殺念慮と学歴、雇用形態に相関がみられたことと関連があるかもしれない。学歴が低い場合には、不本意ながら派遣等の不安定な雇用形態で働かざるを得ないといったことが考えられるが、そうして得た職すらも失う状況に至り、抑うつ感を深めてしまうといったことがあるのかもしれない。先に示した「ところが、リーマンショックや何かで、ここで打ちどめとなって、この生活水準が今度は、この間はやっぱり派遣も含めていますので、ヘルパーの派遣とかの。人材派遣会社になっちゃうんですが、当面落ちるところまで落ちます。自分が落ちました。」という語りは、示唆的である。

KJ 法によるインタビューデータの分類からは、SDS 高群と SDS 低群の語りに違いがあることがみられた。SDS 高群では、〈妻の借金〉、〈生活保護の検討〉や〈希死念慮〉等の概念にみられるように、失業が生活の危機へと直結する契機となることが窺える語りがみられたが、SDS 低群では、〈ストレスなし〉や〈失業で得たもの〉等のように失業を必ずしもマイナスと捉えていない傾向が窺えた。また、SDS 高群の語りには経済的側面が色濃く出ていたのに対し、SDS 低群では経済的側面よりも今後に向けての展望が語られた点に特徴があったように思われる。

KH Coder を用いたテキストマイニングによる分析からは、まず、SDS 高群と SDS 低群の頻出語の比較より、両者の語りに違いがあることが見られた。高群は「現在」に着目しネガティブな語が頻出するのに対し、低群は「将来」も視野に入れポジティブな語が表出されている様子が窺えるが、このことと SDS 得点に関連があるのかもしれない。換言すれば、SDS 得点は“現在のつらさの反映”と言えるのではないだろうか。そのつらさゆえに、SDS 高群は一種の視野狭窄状態に陥っているものと考えられる。さらに、上述したような KJ 法による分類結果とも、整合性があるように思われる。

共起ネットワーク分析からは、両群間の語りのパターンの違いをとらえることができた。共起性の強い語が必ずしも出現頻度の高い語とは限らないが、しかしそれゆえに、対象者の一部分での語りの特徴をとらえるきっかけになるものとする。たとえば、SDS 高群の 1 人の「やっぱり嫁さんに気を使

う…気を使ってしまいますね、うーん。気を使ってしまうのと、んー、あとストレスというか、楽しめな…何をしても楽しめない、テレビ見てもおもしろくないし…ストレス…ストレスなんかいっぱいありますけどね。」という語りと、SDS 低群の1人の「自分ではそんな受けてないつもりなんですけど、最初のやっぱその焦るというのが一番大きくて、なんかストレス感じますか？ って言われてそんな大きく…まあ感じるかもしれないですけどなんかこう、なんかはつきりこれっっちゃうのが、出てこないんですけど。」という語りは、同じ「ストレス」という語についてニュアンスの違いがみてとれる。KH Coder による分析の利点は、先に述べたように、樋口(2013)が『データの一部を引用して解釈を加えることも否定しないし、むしろ推奨している』と述べているが、元データに容易に立ち返ることができる点にもあるように思われる。

対応分析の結果からも、上述してきたような特徴を視覚的にとらえることができ、また、SDS 高群、SDS 低群、それぞれのケースについて視覚的にとらえることが可能となり、グルーピング等に有用であることが示唆されたが、ことに SDS 高群でこの傾向が顕著であったといえる。

本研究の目的とした、「おもに中年男性の失業がもたらす貧困および自殺のリスクを示し、必要な心理的支援の考察を試みる」という点のうち、とくに「必要な心理的支援」に関して、今回の分析では十分に明らかにすることができなかった。しかし、たとえば、「会社で相談したいというか、そういうのがいなかったということ。相談できる人があまり、仲のいい人があまりいなかったし。パワハラみたいなこともちょっとあったし。」(47歳)、「こうやってアンケートをとってくれるだけできつと、自分1人でため込んでたものを相談できたりとかできるので、すごくいいことだと思うんですよ。(中略) やっぱ自分より社会のことを知っている人と相談できれば、きつと自殺とかも考えなかったと思うし。」(50歳)、「うん、相談。なんとなく困ったときに相談するところがない。一番悩みだね。」(64歳)といった SDS 高群の特徴語としてリストアップされた「相談」という語を含む語りからは、「相談したくても相談先がない」あるいは「相談しようとしても何を相談したらいいかわからない」といった中年男性の苦悩が窺え、支援の際にこのあたり

を考慮しておく必要があることが示唆される。また、半構造化面接と同時に
おこなった人生曲線（ライフライン）の描画では、SDS 得点が 48 点以上（女
性を含む 14 名）の方のうち、6 名が起伏のない“平板”な曲線を描いてい
たとの結果があることから、今回の分析と組み合わせて検討をおこなうこと
で、当事者の心理的な変化をある程度把握することが可能となり、的確な支
援につなげることができるものと考ええる。

V. 今後の課題

本研究においては分析に際し、KJ 法による分類とテキストマイニングの
手法を併用したが、先行研究に示される通り、KJ 法による分類の結果が、
計量的な分析によっても確認されることとなった。今後は、どのような対象
に、いつ、どのような支援が必要かについて、さらに考察を深めていく必要
があるものと考ええる。ことに、支援ニーズが「ない」とする人へは支援の難
しさがある。ニーズが「ない」のではなく、「思いつかない」あるいは「言
語化できない」といったことが推測されるが、顕在化しているニーズだけ
ではなく、潜在ニーズを探ることが求められよう。本研究の結果から、心身の
状態や困窮の度合い等により、支援の内容やアプローチの方法を柔軟に変え
る必要があると思われるが、このことから、まず失業中の方の心身の状態
をスクリーニングすることは有用であると考ええる。

また、今回は除外したが、女性対象者の語りとの比較により、新たな知見
が得られることも考えられる。今回の調査においては、地域特性を考慮する
必要があるものと思われるが、サンプル数に限りがあり、欠損値も多く存在
したことから、同様の調査を継続しておこなっていくことも検討すべき課題
であると思われる。

謝辞

インタビュー調査にご協力くださいました皆様、関係機関の関係者の皆様
に感謝いたします。

参考文献

- 土堤内昭雄 2010 中年男性の社会的孤立について——格差社会の中高年男性クライシス ジェロントロジージャーナル No.10-011
- 樋口耕一 KH Coder2.x チュートリアル http://khc.sourceforge.net/kh_tuto.html 2013.8.5
- 石津和子・高橋美保・森田慎一郎 2010 失業者に対する意識：失業者との関係性に着目した KJ 法による分析 駒沢女子大学研究紀要 17, 23-37,
- 勝谷紀子・岡 隆・坂本真士・朝川明男・山本真菜 2011 日本の大学生におけるうつ病のしろうと理論：テキストマイニングによる形態素分析と KJ 法による内容分析 社会言語科学 13 (2) , 107-115
- 川喜田二郎 1967 発想法 一創造性開発のために 中央公論社
- 森田次朗 2008 自殺願望の規定要因に関する一考察——JGSS-2006 データによる分析——JGSS で見た日本人の意識と行動：日本版 General Social Surveys 研究論文集 [7] (JGSS Research Series No.4) , 107-119
- 中村恵子・河内浩美・小林正子・丸山公男・平川毅彦 2011 メンタルフレンド活動におけるメンタルフレンド自身への効果 新潟青陵学会誌 4 (1) , 35-44
- 野村亮太・丸野俊一 2009 熟達した噺家の語りに<核>として現れる中心的な概念：共起ネットワークマッピングによる噺家の信念地図の作成 笑い学研究 (16) , 12-23
- 澤田康之・崔 允禎・菅野早紀 2010 不況・失業と自殺の関係についての一考察 日本労働研究雑誌 No.596,58-66
- 四方理人・駒村康平 2011 中年年齢層男性の貧困リスク——失業者の貧困率の推計 日本労働研究雑誌 No.616,46-58
- 武田啓子・渡邊 順子 2012 女性看護師の腰痛の有無と身体・心理・社会的姿勢に関連する因子とその様相 日本看護研究学会雑誌 35 (2) , 113-122
- 総務省統計局ホームページ 労働力調査 <http://www.stat.go.jp/data/roudou/>
- 厚生労働省ホームページ 福祉行政報告例 <http://www.mhlw.go.jp/toukei/list/38-1.html>

内閣府・警察庁 「平成 24 年中における自殺の分析」

<http://www8.cao.go.jp/jisatsutaisaku/toukei/pdf/h24joukyou/3-1.pdf>